

日本語学習者のストーリー描写における 名詞修飾の使用実態

—作業課題・習熟度・母語による
違いに注目して

徐乃馨

◆要旨

本 研究は作業課題、習熟度、母語による違いに注目して、日本語学習者によるストーリー描写における名詞修飾を調査し、比較分析を行ったものである。その結果、作業課題による違いとしては、日本語母語話者と韓国語母語話者は話す課題より書く課題のほうが名詞修飾の使用が多いこと、中国語母語話者は話す課題と書く課題間の名詞修飾の使用の増加が少ないことがわかった。習熟度による違いとしては、中級から上級に上がるにつれ、名詞修飾の使用が増加することがわかった。そして、話す課題と書く課題間、中国語母語話者と韓国語母語話者間で、増加の傾向に違いが見られた。作業課題による違いにおいても、習熟度による違いにおいても、母語の影響が見られ、名詞修飾の習得と使用には複数の要因が絡んでいると言える。

◆キーワード

名詞修飾、習熟度、母語の影響、ストーリーテリング、ストーリーライティング

◆ABSTRACT

This study analyzes interlanguage variability, influences of proficiency and L1 of Japanese learners by investigating the actual use of noun modifications in story descriptions. The results showed that Japanese native speakers and Korean native speakers used more noun modifications in written tasks than in oral tasks, but Chinese native speakers used slightly more noun modifications in written tasks than in oral tasks. Moreover, advanced learners used more noun modifications than intermediate learners, and there was a difference of increases between written tasks and oral tasks in Chinese native speakers and Korean native speakers. From this, I concluded that interlanguage variability, influences of proficiency and L1 are all involved in the acquisition of noun modifications.

◆KEY WORDS

Noun modification, Proficiency, L1 influence, written task, oral task

The Actual Use of Noun Modification Structures
in Story Description by Japanese Learners
Analyzing Interlanguage Variability,
Influences of Proficiency and L1

NAIXIN XU

1 はじめに

日本語の名詞修飾は談話を展開させる機能を持っている。しかし、日本語学習者は談話展開機能の名詞修飾を十分習得できていないとされている(増田2001,2002; 矢吹ソウ2013)。いかにして習得を促進できるかを解明するために、学習者の使用実態を調査する必要がある。

先行研究では、学習者の習熟度や母語が影響していると示唆されているが、これまでの先行研究では話す課題、書く課題の一方しか調査が行われておらず、学習者の個人内において、話す課題と書く課題とで、名詞修飾の使用に違いがあるかが不明である。また、これまでの意味的・機能的観点からの習得研究は、客観テストで学習者の日本語能力を統制したうえで、調査を行ったものがなく、習熟度による違いを十分考察できたとはいえない。

そこで、本研究は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(以下I-JAS)を使用し、学習者の母語、日本語能力を統制したうえで、日本語学習者によるストーリーテリング(話す課題)とストーリーライティング(書く課題)における名詞修飾について、意味的・機能的観点から比較分析を行う。

2 問題の所在と本研究の位置づけ

2.1 「行為主体者」と「時間差」

これまでの意味的・機能的観点からの習得研究では、「行為主体者」「時間差」という観点で分析が行われ、学習者の名詞修飾の習得は描写的なものから談話展開的なものへと進むと考えられている。

「行為主体者」「時間差」の観点は増田(2002)で初めて使用され、それまでの主名詞の種類をヒト・モノに、修飾節の述語の形式をル・タ・テイル・テイタに分類する研究(増田2000b)とは一線を画すものである。「行為主体者」の観点で行われた調査の結果、学習者は「行為主体者」を主名詞とする修飾節が使えていないことがわかっている(増田2002, 矢吹ソウ2013)。そして、「時間差」

の観点で行われた調査の結果、学習者は「時間差あり」が使えていないことがわかっている(増田2002, 矢吹ソウ2013)。また学習者はル形で「時間差なし」、タ形で「時間差あり」の修飾節を使用することがわかった(伊藤2012)。

しかし、これらの調査は「行為主体者」「時間差」の定義が十分なされないまま行われているため、分類がぶれる可能性がある指摘され、新たな分類基準が設定されている(徐2019、表1)。

表1 「行為主体者」「時間差」の分類基準の比較

分類基準	増田(2002)	徐(2019)
行為主体者	名詞修飾の主節での文法的役割	①名詞修飾の主節において果たす文法的役割 ②被修飾名詞が修飾節において果たす文法的役割 ③被修飾名詞の有生性
時間差	「主節時の事態」の発生時に「連体節の事態」が並行的に存在しているか	修飾節事態の生起時点と主節事態の生起時点間のもの 「時間差判断不可」: 修飾部の状態性が「属性・状態」「習慣」であるもの、あるいは主節に述語のないもの

つまり、「行為主体者」は、①主名詞が主節において果たす文法的役割が主語である、②主名詞が修飾節において果たす文法的役割が主語である、③主名詞が有生である、の3つの条件を満たすものとしている(例1)。そして、「時間差」は、修飾節も主節も特定時点が捉えられるという前提を設けたうえで、主節事態と修飾節事態の生起時点間のものに定義されている。「時間差あり」は、主節事態と修飾節事態の生起時点が前後している名詞修飾(例1)、「時間差なし」は主節事態と修飾節事態の生起時点が同時である名詞修飾(例2)としている。本研究はこの「行為主体者」「時間差」の定義を採用し、分類を行う。

- (1) すると物音が起きたマリが窓を開けてケンに気づき、ケンは無事家の中に入ることが出来ました。(JJJ07、行為主体者、時間差あり)
- (2) 夜も遅く二階で眠っているマリはケンが叫んでいることに気がつきません。(JJJ14、行為主体者、時間差なし)

2.2 作業課題による違い

これまでの意味的・機能的観点からの習得研究は、いずれにおいても話す課

題、書く課題の一方しか調査が行われていない。これでは、学習者の個人内において、話す課題と書く課題とでどのような使用の違いがあるかが不明である。

これまでの研究では、作業課題がL2産出の正確さ、複雑さ、流暢さに影響を与えることが指摘されている (Ellis 2008: 822)。日本語の習得に関しては、学習者は話す課題より書く課題のほうでより複雑な言語形式を表出し (奥野・リスダ 2015, 小口 2018)、それには言語知識だけではなく、処理的な知識やメタ言語的知識も関わっている可能性があるとの報告がある (奥野・リスダ 2015, 小口 2018)。

指導の面而言えば、話す課題も書く課題も同じく学習者の産出でありながら、教室の指導のあり方も大きく異なる。特に、内容の展開に関するフィードバックは、話す課題では学習者の認知的負担が大きいため、口頭訂正フィードバックが困難である。一方、書く課題では学習者にとって負担が比較的小さいため、ライティングフィードバックが行いやすい (田中 2015: 109-110)。

そこで、本研究では、話す課題と書く課題の両方のデータを分析対象とし、個人内における作業課題による差があるかどうかを観察する。

2.3 習熟度と母語による違い

これまでの意味的・機能的観点からの習得研究では、学習者の習熟度や母語によって名詞修飾の使用に差があることがわかっている (増田 2002, 伊藤 2012, 矢吹ソウ 2013)。

習熟度による違いについて、中級学習者の使用する修飾節の大半が「時間差なし*被観察物(者)」^[注1]タイプであり、上級学習者はある程度「行為主体者」を使用するが、日本語母語話者に比べ、「時間差あり」の使用が少ないとされている (増田 2002)。また、中国語を母語とする学習者は習熟度が上がるにつれ、名詞修飾の使用が増えると報告されている (伊藤 2012)。これらの先行研究から想定される学習者の習得段階は図1に示すとおりである。

被修飾名詞	修飾節と主節の時間的關係	名詞修飾の機能
被観察物(者) ↓ 行為主体者	時間差なし ↓ (時間差あり)	描写的 ↓ (談話展開的)

図1 想定される学習者の名詞修飾節の習得段階

学習者の母語の影響について、中国語や韓国語を母語とする学習者は英語を母語とする学習者に比べ、「行為主体者」をより多く使用すること、中国語、英語母語の学習者は「時間差なし」を多く使用するのに対し、韓国語母語の学習者は「時間差あり」を多く使用することが報告されている (矢吹ソウ 2013)。

しかし、これらの先行研究は習熟度の基準がクラス分けであり、学習者の日本語能力を十分統制できていないため、調査の結果から習熟度や母語による違いを十分考察できたとはいえない。

そこで、本研究では、学習者の母語や日本語能力を統計的に統制したうえで、調査を行い、習熟度による違いを明らかにする。

表2 本研究の位置づけ

	学習者の母語、人数	習熟度の基準	作業課題	「行為主体者」 「時間差」定義
増田 (2002)	複数母語、人数不明	クラス分け	書く課題	不明確
伊藤 (2012)	中国語 12名	クラス分け	話す課題	不明確
矢吹ソウ (2013)	英語、中国語、韓国語各 10名	クラス分け	書く課題	不明確
本研究	中国語、韓国語 調査1: 各 50名、調査2: 各 18名	SPOT J-CAT	話す課題 書く課題	明確

2.4 本研究の位置づけと研究課題

本研究は先行研究を踏まえ、話す課題と書く課題両方において、客観テストで習熟度の判定を行ったうえでレベル分けし、中級学習者と上級学習者の名詞修飾の使用実態を調査する (表2)。

本研究の研究課題は、中国語母語話者、韓国語母語話者と日本語母語話者 (以下 CNS、KNS、JNS) の比較を通して、名詞修飾の使用傾向について、以下の2点を明らかにすることである。

【課題1】話す課題と書く課題 (以下 ST、SW) 間で違いがあるか。

CNS、KNS、JNS間で違いがあるか。

【課題2】中級学習者と上級学習者間で違いがあるか。

CNS、KNS間で違いがあるか。

3 分析方法

3.1 分析データ

本研究はI-JASを利用し、調査を行う。このコーパスを使用する理由は2つある。日本語能力を測る客観テストが2種類 (J-CATとSPOT) 実施されており、学習者の習熟度を判定する基準が厳密であることに加え、同一学習者による発話と作文を備えており、学習者の個人内の作業課題による使用の違いを調査することができるからである。

具体的には、I-JASの第三次公開データに収録されているJNS、CNS、KNSのST2とSW2のデータを用いる。課題に使用された4コマ漫画「鍵」は、①主人公である男性ケンが鍵を持たずに帰宅し、②寝ている妻を起こそうと試みるが、妻が起きず、③梯子を使って2階から入ろうとしているところを、警察に見つかったが、④幸い妻が起きて誤解が解けたというものである (図2)。迫田ほか (2016) によると、学習者はタスクを開始する前に、まず絵をよく見て、1分以内でストーリー内容を確認するよう指示された。また、学習者は「鍵」というタイトルと「ケンはずちの鍵を持っていませんでした」に続けてストーリーを話す (書く) よう指示された。SWはSTから40～50分後に実施された。

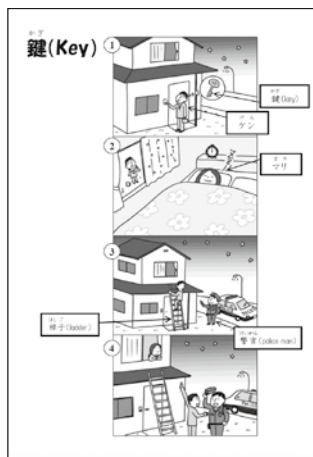


図2 「鍵」(迫田ほか2016)

3.2 分析対象と手続き

名詞修飾の取り出しに関しては、何をもって「修飾節」とするかは議論が分かれるところだが、本研究では、増田 (2002)、矢吹ソウ (2013) を参考に、分析の対象と対象外とするものを以下のようにする。

分析の対象を、内の関係にある名詞修飾節にする。具体的には、主に動詞による修飾 (泥棒だと疑う警官、裏庭にあった梯子) を対象とした。そして、被修飾名

詞が修飾節における文法的役割がないため、a. 外の関係 (起きる気配)、それ自体が時点を表すため、b. 副詞的成分 (屋根に梯子をかけて窓まで登ろうとしたところ)、修飾節事態の生起時点が捉えられないため、c. 連体詞によるもの (その騒ぎ)、d. 「の」を介するもの (中にいるはずのマリ)、e. 形容詞で補語を伴わず、かつ非過去のもの^[注2] (深い眠り) を対象外とした。

取り出された名詞修飾にまず、①修飾節の主節における文法的役割、②被修飾名詞の修飾節における文法的役割、③被修飾名詞の有生性、④修飾部の状態性、それぞれのタグをつけ、分類を行う。次に、2.1で述べた基準に従い、①②③の分類に基づき「行為主体者」を抽出する。それとは別に、①④の分類に基づき、時間の有無を判断し、「時間差あり」を抽出する。そして、それぞれの使用回数を集計する。

4 調査1：作業課題による違い

4.1 目的と結果の想定

本調査の目的は【課題1】STとSW間で、名詞修飾の使用傾向に違いがあるか、CNS、KNS、JNS間で違いがあるかを明らかにすることである。

先行研究では、時間的余裕のあるSWのほうでより複雑な言語形式が表出する傾向にあることや (奥野・リスダ2015)、STでは明示的な接続表現が使用されるが、SWではSTで用いられる明示的な接続表現より名詞修飾節を用いて、新しい情報を持ち込んでいること (増田2000a) が示唆されている。

名詞修飾には複数の単文を一つの文にまとめる機能がある。名詞修飾を使用することは、つまり、述語を中心としたまとまり (節) を複数使用した文を産出するということである。これは接続詞を使用する単文や、接続助詞を使用する複文より複雑なものであるため、STよりSWのほうでより多くの名詞修飾が使われるのではないかと予想する。

4.2 調査1で分析するデータ

3.1で述べた分析データのうち、CNS (CCM) 50名、KNS (KKD、KKR) 50名、

JNS (JJI) 50名のデータを対象とする。学習者のJ-CAT、SPOTの得点について分散分析を行ったところ、有意差が見られなかった。なお、J-CAT、SPOTの平均得点の判定は両方中級である(表3)。

表3 調査1の対象

母語 (人数)	中国語 (50)	韓国語 (50)	日本語 (50)
SPOT 平均 (SD)	74.60 (6.92)	76.36 (10.44)	—
J-CAT 平均 (SD)	234.76 (44.79)	244.66 (64.66)	—

4.3 結果

調査1の結果を表4に示す。有意差が見られなかった項目の使用回数を網掛けで示す。

表4 作業課題別の名詞修飾の使用回数

母語 (人数)	中国語 (50)		韓国語 (50)		日本語 (50)	
	ST	SW	ST	SW	ST	SW
作業課題						
名詞修飾	10	17	24	72	39	76
行為主体者	2	9	5	33	12	35
時間差あり	2	4	2	26	6	16

名詞修飾、「行為主体者」、「時間差あり」の各調査項目において、CNS、KNS、JNSそれぞれ作業課題による使用傾向の違いがあるかを調べるため、ウィルコクソンの符号順位和検定を行う。

検定の結果、名詞修飾について、JNS ($z=-3.25, p<.01$) と KNS ($z=-4.55, p<.01$) は ST より SW のほうが有意に多いが、CNS の ST と SW 間には有意差が見られなかった ($z=-1.36, n.s.$)。JNS と KNS は、SW における使用回数が近似しており、作業課題による差が有意であることがわかった。一方、ST でも SW でも、CNS は対象となる名詞修飾の使用自体が JNS や KNS と比べ、格段に少ないうえ、作業課題による使用回数の差が小さいということである。

「行為主体者」名詞修飾について、JNS ($z=-3.38, p<.01$)、KNS ($z=-3.75, p<.01$)、CNS ($z=-2.37, p<.05$)、それぞれ ST より SW のほうが有意に多いことがわかった。ST における「行為主体者」の使用は、いずれの母語話者においても少ない。一方、SW では、JNS と KNS は「行為主体者」の使用回数が近いが、CNS は使

用回数が少なく、JNS の ST よりも少ない。

「時間差あり」名詞修飾について、JNS ($z=-2.42, p<.01$) と KNS ($z=-4.38, p<.01$) は ST より SW のほうが有意に多いが、CNS の ST と SW 間に有意差が見られなかった ($z=-1.88, n.s.$)。ST における「時間差あり」の使用は、いずれの母語話者においても少ない。一方、SW では、KNS > JNS > CNS の順に使用回数が減少し、特に CNS の使用が少ない。

4.4 考察

4.4.1 ST・SW間で名詞修飾使用が増加した理由 (JNS、KNS)

なぜ、ST より SW のほうが名詞修飾の使用が多いのだろうか。その理由として、言語知識、処理的な知識が関わっていることが考えられる(奥野・リスダ 2015, 小口 2018)。

まず、言語知識として、名詞修飾を使用することで、よりコンパクトに表現したり、ストーリーの展開をよりスムーズにしたりすることができるからであると考えられる。例えば、ST ではテ形で単純に繋いでいるものを、SW では名詞修飾に直し、コンパクトに表現している(例3)。そして、ST では時間節で前後関係だけを表しているものを、SW では名詞修飾で原因などの情報を付け加え、先行文脈と関係づけることによって、よりスムーズにストーリーを展開させている(例4)。このように、話し言葉はある程度の冗長性を持ったほうが理解しやすい(畠 2009: 236-237) 一方、書き言葉では、名詞修飾を使用することで、冗長性を回避し、よりコンパクトに表現できる(山田 2004)。

- (3) a. ちょっとした騒ぎになり、マリが起きてきて、事情を説明してくれたのでようやく警官の人は笑顔になりあの一、「お気をつけて」と言ってあの帰っていきました (JJI10-ST2)
- b. すると騒ぎを聞いて起きてきたマリが窓際に出てきました。(JJI10-SW2)
- (4) a. で、あの後にマリが起きて、あの、警官と、ケンを見て、いろいろせちゅめい(説明)した後、まあか、問題は解決になりました (KKD15-ST2)
- b. その音を聞いたマリが起きて警官に説明をして誤解をとけました。(KKD15-SW2)

次に、処理的な知識も関わっていると考えられる。本研究で用いるデータはSTの後、SWを行っており、リハーサル効果も排除できない。しかし、そもそもSTとSWとで、言語処理の難易度が異なることが大きな原因ではないだろうか。STでは即時的な処理が求められるが、SWではプランニング時間がより長く、かつ産出したものを目視できるため、言語形式に多くの注意資源を分配できる。奥野・リスダ(2015)ではJNSには課題による変異性が見られないと報告されているが、本研究調査1ではJNSとKNSに課題による違いが見られた。これは対象とした項目の違いに起因し、プランニング時間の効果の違いによるものであると考えられる。具体的には、奥野・リスダ(2015)の調査対象である文末形式は直接ストーリー展開に関わるものではないのに対し、本研究調査1の対象の名詞修飾は直接ストーリー展開に関わる。特に、前文脈との関連性を示す必要があることから、学習者の負担が大きく、プランニング時間の差がより顕著に出ていると考えられる。

4.4.2 ST・SW間で名詞修飾使用の増加が少ない理由(CNS)

ではなぜ、CNSはSTからSWへの作業課題間の名詞修飾の使用増加が少ないのだろうか。その理由は、言語知識の欠如とメタ的な言語知識の影響の2つがあると考えられる。

まず、4.4.1で述べたように、JNS、KNSはSTの後で行われたSWでは、ストーリーの展開をよりスムーズに、かつコンパクトに表現可能な名詞修飾を使用している。しかし、CNSは名詞修飾のこのような機能に気づいていない可能性がある。

次に、言語知識の欠如以外にも、メタ的な言語知識の影響が考えられる。作文は発話に比べ、学習者が持つメタ的な言語知識が反映されやすいと言われている(小口2018)。そのため、KNSはST後のSWでより多くの名詞修飾を使用している。しかし、CNSはKNSと異なる方向で、メタ的な言語知識に影響されている可能性がある。4.3で述べたように、そもそもCNSはKNSに比べ、名詞修飾、「行為主体者」、「時間差あり」の使用が少ない。その理由として、中国語は日本語と違い、「情報付加的修飾節」が用いられることが少なく、日本語と対応することが少ないからであると考えられている(堀江・バルデン2009: 61-

73)。例えば、例5を韓国語に訳すとSaになり、韓国語としても自然な表現である。一方、中国語に直訳するとSbになり、非文ではないが、不自然であり、容認されにくい。それより、名詞修飾を使わず節を並べたScのほうが自然である。つまり、中国語では名詞修飾より等位節を使用したほうが自然である。

(5) すると物音で起きたマリが窓を開けてケンに気づいた。

a. 기적 소리에 깨어난 마리가 창문을 열고서는 켄이 온 것을 알아차렸다. (名詞修飾)

(物音で起きたマリが窓を開けてケンが来たことに気づいた。)

b. 听到声响起来的玛丽(就)打开窗子, 看到了肯。 (名詞修飾)

(物音を聞いて起きたマリが窓を開けてケンに気づいた。)

c. 玛丽听到声响(就)起来打开窗子, 看到了肯。 (等位節)

(マリが物音を聞いて起きて、窓を開けてケンに気づいた。)

このように、KNSもCNSも母語で自然な表現を日本語で使用している可能性が考えられる。そのため、CNSはSTの後で行われたSWでは、文法的な正確さを落としたくないという意識が働き、STで使用した形式を、わざわざ中国語で不自然でより複雑なものに変換せず、無難なテ形、接続詞などのまま使用しているのではないだろうか(例6)。

(6) a. その時マリは、マリは外の声を聞いて起きました

警官に説明ししたので、うーケンはうちに一入れます (CCM08-ST2)

b. マリは声を聞いて起きました。警官に説明しました。 (CCM08-SW2)

5 調査2: 習熟度による違い

5.1 目的と結果の想定

本調査の目的は【課題2】中級学習者と上級学習者間で、名詞修飾の使用傾向に違いがあるか、CNS、KNS間で違いがあるかを明らかにすることである。

2.3で述べた先行研究からも示唆されているように、習熟度が上がるにつれ、名詞修飾、「行為主体者」「時間差あり」の使用が増えると予想する。

5.2 調査2で分析するデータ

3.1で述べた分析データのうち、CNS18名（上級中級各9名）、KNS18名（上級中級各9名）、JNS18名（無作為抽出）を対象とする。学習者（CNS、KNS）のレベル分けの基準はJ-CAT、SPOTの得点である。具体的には、両方の得点が上級以上の判定である学習者を上級に、両方の得点が中級の判定である学習者を中級に分ける。その際、同習熟度のCNS、KNS間、平均値に有意差がないように統制する。両方の得点の判定が一致しない場合は対象外とする（表5）。

5.3 結果

調査2の結果を表6に示す。中級と上級の間で5回以上増加した項目を網掛けで、中級と上級間で有意差が見られた項目はより濃い網掛けで示す。

名詞修飾、「行為主体者」、「時間差あり」の各調査項目において、CNS、KNSそれぞれ中級と上級の間で使用傾向の違いがあるかを調べるため、CNS・ST、CNS・SW、KNS・ST、KNS・SWそれぞれの中級と上級間で、ウィルコクソンの順位和検定を行う。

表6からわかるように、CNS・KNS、ST・SWに共通して、中級と上級の間で名詞修飾の使用回数は5回以上増加している。しかし、「行為主体者」「時間

表5 調査2の対象

習熟度	中級		上級		—
	中国 (9)	韓国 (9)	中国 (9)	韓国 (9)	
母語 (人数)					日本 (18)
SPOT 平均 (SD)	70.00(4.76)	70.44(5.40)	84.00(2.36)	85.78(2.74)	—
J-CAT 平均 (SD)	208.44(22.30)	210.33(27.10)	296.11(28.53)	296.11(28.82)	—

表6 習熟度別の名詞修飾の使用回数

母語 (人数)	中国語 (18)				韓国語 (18)				日本語 (18)	
	ST		SW		ST		SW		ST	SW
習熟度	中級	上級	中級	上級	中級	上級	中級	上級	—	—
名詞修飾	0	7	1	10	1	8	11	17	15	33
行為主体者	0	1	0	5	0	2	5	8	6	14
時間差あり	0	1	0	2	0	1	3	5	6	9

差あり」で増加が見られたのは、CNSのSWのみである^[註3]。つまり、KNSと比べ、CNSのほうが中級から上級への変化がより顕著であるからと言えよう。

STにおいては、「行為主体者」「時間差あり」の使用回数は、CNSの中級・KNSの中級、CNSの上級・KNSの上級、それぞれで近似しており、上級になるにつれ、JNSの使用回数に近づいている。一方、SWにおいては、CNSはKNSより使用回数が少ない。KNSの上級はJNSの一人当たりの使用回数に近いが、CNSは上級でさえKNSの中級程度の使用回数に止まっている。

5.4 考察

5.4.1 中級・上級間で名詞修飾使用が増加した理由（CNS・SW）

なぜ、CNSはSWにおいて、中級と上級との間で有意差が見られたのだろうか。CNSはSTとSW両方において、中級と上級との間で、名詞修飾の増加が認められている。つまり、CNSにとっては、中級から上級の間は、名詞修飾の使用が増える期間であると考えられる。SWで「行為主体者」の増加が見られたのも、名詞修飾の増加によるものであると考えられる。この結果は、2.3で挙げた先行研究の伊藤（2012）の結果や、5.1で述べた「習熟度が上がるにつれ、名詞修飾の使用が増加する」という予想にも合致している。

5.4.2 中級・上級間で名詞修飾使用が増加しない理由（KNS・SW）

ではなぜ、KNSはSWにおいて、中級と上級との間で有意差が見られなかったのだろうか。中級のKNSはすでにCNSの上級以上に名詞修飾を使用し、上級のKNSとの間に差があるとしても、小さいものであると考えられる。そのため、統計的に有意差が見られなかったのではないだろうか。

5.4.3 CNSとKNSの名詞修飾使用の発達過程の違い（SW）

以上の結果から、CNSとKNSの名詞修飾の発達過程が異なると推測する。

JNSがCNSより多く名詞修飾を使用する点においては、伊藤（2012）でも同じ結果を得ている。一方、KNSに関しては、矢吹ソウ（2013）では、KNSの名詞修飾の使用がJNSより少なく、CNSと同程度であると報告されている。矢吹ソウ（2013）の結果は、本研究の調査1、調査2両方の結果と異なっている。こ

これは、研究対象であるKNSの習熟度の違いによるものであると考えられる。矢吹ソウ(2013)では中級未満と思われる学習者を対象としているが、本研究の調査1では中級、調査2では中級と上級の学習者を対象としているため、名詞修飾の使用が多いと考えられる。

先行研究と本研究の調査結果を踏まえ、習熟度による違いについては、CNSとKNSの発達順序と母語の影響との相互作用によるものであると考えられる。

つまり、CNSとKNSの名詞修飾の使用が増加する過程を以下のように推測できる。①中級未満のCNSとKNSは同程度に名詞修飾を使用する。②中級になるにつれ、KNSの使用回数が増え、CNSとKNSとで使用回数の差が開く。③上級になるにつれ、KNSの使用回数の増加が比較的緩やかになる一方、CNSの使用回数が増え、KNSの中級レベルの使用回数と同程度になる。

これはつまり、同程度の使用回数に達するのに、CNSがKNSより時間がかかるため、習熟度が上がることに伴うCNSの名詞修飾の使用の増加がKNSと比べ、遅れているということだと考えられる。学習者の発達順序は母語の影響との相互作用があり(Lightbown & Spada 2002: 85)、学習者の母語の違いにより目標言語の発達の道筋が異なる(山岡1997: 196)と考えられる。目標言語(日本語)の情報付加的名詞修飾に相当するものが中国語で不自然であるため、代わりに等位節や副詞節などが用いられる。その影響で、CNSが情報付加的名詞修飾を発達させる過程において、KNSと異なるのではないだろうか。

6 まとめと今後の課題

本研究は先行研究を踏まえ、学習者母語、日本語能力を統制したうえで、日本語学習者によるストーリー描写のSTとSWにおける名詞修飾について、作業課題による違いと習熟度による違いの観点から比較分析を行った。

その結果、作業課題による違いとしては、JNSとKNSはSTよりSWのほうが名詞修飾の使用が多いこと、CNSはSTからSWへの名詞修飾の使用の増加が少ないことがわかった。その原因として処理的な知識や学習者のメタ的な言語知識が影響していることが示唆された。

また、習熟度による違いとしては、中級から上級に上がるにつれ、名詞修飾

の使用が増加することがわかった。そして、STとSW間、CNSとKNS間で、増加の傾向に違いが見られた。STにおいては、CNSとKNSとで使用傾向が似ているが、SWにおいては、CNSはKNSと比べ、名詞修飾の使用が少なく、CNSの上級にKNSの中級と同程度の使用が見られた。このような違いが見られるのは、習得過程における母語の影響だと考えられる。

このように、作業課題による違い、習熟度による違いの両方において、母語の影響が見られ、名詞修飾の習得と使用には複数の要因が絡んでいると言える。

本研究はCNSとKNSを対象に調査を行ったが、母語の影響を分析するには、類型論的に日本語とタイプの異なる母語の学習者の使用実態も調査する必要がある。そして、習熟度による違いに関しては、縦断的調査を行うことで、個人内の名詞修飾の習得過程を分析できると考えられる。 <首都大学東京>

謝辞

本稿は、TMU日本語・日本語教育研究会第11回研究会、及び、日本語/日本語教育研究会第10回大会での発表内容に加筆・修正を加えたものです。発表・執筆にあたり、多くのご指導をくださった奥野由紀子先生、執筆にあたりご助言をくださった建石始先生をはじめ、会場内外で貴重なご助言をくださった皆様に厚くお礼申し上げます。そして、ネイティブチェックをくださった皆様、貴重なご助言をくださった査読者の先生方に心よりお礼申し上げます。また、本稿は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を利用して行われたものです。代表の迫田久美子先生をはじめ、関係者の皆様に深く感謝いたします。

注

- [注1] …… 増田(2002)では、「行為主体者」の対立概念として、「被観察物(者)」を使用している。
- [注2] …… 形容詞で補語を伴うもの(人口が少ない町)や、過去のもの(深かった眠り)は本研究で扱うデータにはなかった。
- [注3] …… 中級と上級の間で名詞修飾が増えたのは、「行為主体者」「時間差あり」ではなく、ほとんど「被観察物(者)」「時間差なし」「(時間差判断不可)」である。

参考文献

伊藤絵梨子(2012)「談話データから見る連体修飾節の使用実態—初級日本語教科書との比較から」『葛野』16, pp.42-61. 京都外国語大学

- 奥野由紀子・リスダ, ディアンニ (2015) 「話す」課題と「書く」課題に見られる中間言語変異性—ストーリー描写課題における「食べられてしまっていた」部を対象に『国立国語研究所論集』9, pp.121-134. 国立国語研究所
- 小口悠紀子 (2018) 「話す」と「書く」という課題の違いが中級学習者の語りに及ぼす影響—個人内における接続表現の変異に着目して『日本語／日本語教育研究』9, pp.183-196. 日本語／日本語教育研究会
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6(3), pp.93-110. 国立国語研究所
- 徐乃馨 (2019) 「中上級日本語学習者の物語描写における名詞修飾の使用実態—名詞修飾の習得研究のための新たな分類基準を用いて」『小出記念日本語教育研究会論文集』27, pp.21-36. 小出記念日本語教育研究会
- 田中真理 (2015) 「第4章 ライティング研究とフィードバック」大関浩美 (編) 『フィードバック研究への招待—第二言語習得とフィードバック』 pp.107-138. くろしお出版
- 島弘巳 (2009) 「第9章 文章・談話」工藤浩・小林賢次・真田信治・鈴木泰・田中穂積・土岐哲・仁田義雄・島弘巳・林史典・村木新次郎・山梨正明『改訂版 日本語要説』 pp.229-244. ひつじ書房
- 堀江薫・バルデシ, プラシヤント (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』 研究社
- 増田真理子 (2000a) 「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する—4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から」『多摩留学生センター教育論集』2, pp.13-25. 東京農工大学留学生センター・電気通信大学留学生センター
- 増田真理子 (2000b) 「談話展開に関わる接続形式と、それに代わる連体修飾節の使用について—日本語学習者と母語話者が産出したテキストの比較から」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.51-56. 日本語教育学会
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉「怒った親は子どもをしかった」という言い方」『日本語教育』109, pp.50-59. 日本語教育学会
- 増田真理子 (2002) 「学習者はどのような連体修飾節を使っているか—日本語学習者が産出したテキストの分析から」『多摩留学生センター教育研究論集』3, pp.43-50. 東京農工大学留学生センター・電気通信大学留学生センター
- 矢吹ソウ典子 (2013) 「日本語学習者・母語話者によるストーリーテリングでの連体修飾節の用法」『言語文化と日本語教育』46, pp.1-10. お茶の水女子大学日本語文化学会
- 山岡俊比古 (1997) 『第二言語習得研究』 桐原ユニ
- 山田敏弘 (2004) 「非限定的名詞修飾の機能」『岐阜大学 国語国文学』31, pp.1-13. 岐阜大学教育学部国語教育講座
- Ellis, R. (2008) *The Study of Second Language Acquisition* (Second Edition). Oxford: Oxford University Press.
- Lightbown, P. & Spada, N. (2002) *How Languages are Learned* (Second Edition). Oxford: Oxford University Press.